

修士論文要旨

青年期のネット依存傾向者に対する予防の研究

別府大学大学院 文学研究科 臨床心理学専攻
修士課程 M1614002 川上雅也

本研究では、青年期のインターネット依存に焦点を当てる。とりわけオンラインゲーム依存からの離脱に関する要因を調査し、その結果から予防について考察する。

大学生 147 名を対象に質問紙調査を行った。調査内容は、まずフェイスシートとして性別、年齢、学年、オンラインゲームの体験についてそれぞれ尋ねた。使用尺度は、①インターネット依存度テスト (IAT) 20 項目を因子分析して得られた「依存傾向」10 項目「長時間の利用」5 項目「学業への支障」2 項目、②自己肯定意識尺度 (平石, 1990b) の自己肯定性次元を測定する 48 項目 (対自己領域として「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」、対他者領域として「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人的積極性」「被評価意識・対人緊張」の 6 因子構成になっている。)、③大学生用ソーシャルサポート尺度 (片受ら, 2014) 23 項目を因子分析して得られた「親からの評価」12 項目「親からの助言」8 項目を用いた。

オンラインゲーム依存を検討するためにフェイスシートの結果を基に「未経験群」「離脱群」「継続群」の 3 群に分類し男女別に分析した。結果として男性は、継続群は圧倒的に数が多く、未経験群よりも有意に依存傾向が高かった。しかし、自己肯定意識とソーシャルサポートでは各群で有意差はなく、オンラインゲームに親和性が高く止める人が少ないことが特徴である。女性は、各群で依存傾向に有意差はなく、離脱群は親からのソーシャルサポートを得て、人生の目標などがはっきりとしている人たちであることが明らかとなった。

次にインターネット依存を検討するために IAT で定められている判断基準を基に「低群」「中群」「高群」の 3 群に分類した。結果として男女ともに低群は「依存傾向」「長時間の利用」「学業への支障」のいずれも中・高群よりも低いことから、IAT はインターネット依存を見る尺度として妥当であろう。自己肯定意識尺度の得点を見ると、男性では低群が「自己受容」「充実感」「自己実現的態度」では中群よりも有意に高く、「自己閉鎖性・人間不信」では中群よりも有意に低かった。女性は各群の間で有意差はなかった。ソーシャルサポートの得点を見ると、男女とも各群の間に有意差はなかった。

予防について、男性はオンラインゲームに対する親和性が高いため、オンラインゲーム依存に絞った対策が重要である。自己肯定意識を高めるような予防策が必要であり周囲からのサポートを得ることや、自己閉鎖性を軽減する予防策が必要である。女性はインターネットに親和性が高いため、インターネット依存に焦点を当てた対策が重要である。男性よりも学業への支障について意識しており、SNS に依存しやすいため、SNS に頼らない友人関係スキルを学ぶことやインターネット依存が学業や仕事に与える影響について丁寧に説明することが予防策として必要になると考えられる。